

# 鹿沼の自然・栃木の旅

月報第16号

(2013年8・9月)



北光クラブ  
自然観察クラブ

「第9章 甲虫類の生活」より

**兜虫（一名サイカチムシ）と鍬形虫**

夏の頃、クヌギやコナラの樹に何匹もたかって、うまさうに樹液を吸っているカブトムシを君たちはよく知っているね。カブトムシはサイカチの樹にも沢山つくのでサイカチムシとも呼ばれている。「さいかちツナ、さいかちツナ」と呼びながらこの虫をつかまえることは、どこの地方の子供でもやっているが、一寸見にはいかめしいこの虫も実は存外おとなしくて、少しも危険なしにつかまるからだし、大力の虫だからつかまえて来て玩具の車なんぞを曳かせると面白いからだろう。

身体は堂々としていて栗色の甲冑に鎧われている。雄の頭には先の4つに岐れた上反りの立派な角が生え、前胸背からは先が2つに岐れて前に曲った短い角が生えている。形は大きいのも小さいのもあるが、小さいのでも40ミリ近くはあり、大きいのは50ミリ以上もある。身体の厚みも厚く、全体がどっしりとしていて、如何にも荒っぽい虫のようだ。又実際に力も強くて、自分の体重の数十倍のものを曳き、車のついたものを糸につけ角に結んで曳かせると体重の3、400倍もの玩具の自動車でも曳く。だが全くの見かけばかりで、性質は至っておとなしく、折角の大角だって特に喧嘩のために使うのではない。2匹が正面からぶつかり合って、この角で相手を突きつけたり押し合ったりしていることも無いではないが、先ず飾りと思って間違いはない。だから子供達は安心してこれをつかまえて、砂糖水で飼って置く。

ところが兜虫より少し小形の鍬形虫の方はとても喧嘩好きだ。頭の上のいかめしい角は本当は角ではなく大腮おおあごの伸びたもので、所謂鍬形となっている。この鍬形もやはり雄だけにしか無いが、この大腮を打合せて雄同志で戦うさまは中々壮観で、ぶつかるたびに大腮はカチカチという音を立て、身体は互に、上になり下になりして転り合う。だから子供達はこの虫を沢山つかまえてきて、紙の上に土俵を描き、両方から1匹ずつ選手を出して闘わせて遊ぶのが好きだが、勿論武器は腮なのだから、お互に噛み合うのだ。そうして双方組んで立上ったり、頭を相手の腹の下に突込んで

ねかえしたりするが、しかしどちらもキチン質の固い鎧で身をかためているから滅多に怪我はしない。結局は体力の弱い方が降参して、すごすごと身を退くのだ。

しかし鍬形虫にしてもおだやかな性質で、樹を荒らしたりほかの虫をいじめたりすることはなく、ただ樹の甘い汁を吸っているだけだ。

兜虫も鍬形虫も、その幼虫は塵捨場や腐植土の中において腐った有機質を食べ、鍬形虫の幼虫は朽木の洞で朽ちた木質を食べて育つ。

※ 文中の表記は読みやすさを考慮して勝手ながら適宜直しています。

「日本野鳥の会」創始者として知られた中西悟堂ですが、トリばかりではない、ムシにも詳しくあったということがわかる、子供向けの昆虫解説書も作りました。愛すべき昆虫について子どもたちにやさしく語りかけるような本ですが、上下2巻の予定で刊行されながら、下巻は残念ながら幻に終わってしまいました。

参考までに、その全文の目次をご紹介します。

### 『昆虫読本』(上巻)目次

#### 序言

この本を読まれる諸君に

- 第1章 紋白蝶(4月の話)
- 第2章 蜻蛉(5月の話)
- 第3章 蛍(6月の話)
- 第4章 蝉(7月の話)
- 第5章 脚長蜂(8月の話)
- 第6章 鳴く虫のさまざま(9月の話)
- 第7章 螻蛄(10月の話)
- 第8章 蛾のさまざま(11月の話)
- 第9章 甲虫類の生活(12月の話)
- 第10章 水棲昆虫(1月の話)
- 第11章 子煩悩の虫(2月の話)
- 第12章 昆虫の採集法(3月の話)
- 第13章 昆虫標本の作り方(続3月の話)

### 『昆虫読本』(幻の下巻)目次

- 第1章 蟻の生活
- 第2章 蟻のさまざま
- 第3章 蜂の生活
- 第4章 人間に害をする虫
- 第5章 クサガメの仲間
- 第6章 ツノゼミと泡吹虫
- 第7章 単性生殖のアブラムシ
- 第8章 腐敗物・汚物に集まる虫
- 第9章 バッタとナナフシ
- 第10章 茶立虫とカゲロウ
- 第11章 優曇華(草カゲロウ)と蟻地獄(ウスバカゲロウ)
- 第12章 昆虫とは何か
- 第13章 蜘蛛のさまざま
- 第14章 ムカデ、ヤスデ、ゲジゲジ、ミミズ
- 第15章 昆虫の飼育法
- 第16章 昆虫採集樹



## 人物紹介・中西悟堂

1895年(明治28年)11月金沢市長町に生まれたとされる。幼名富嗣(とみつぐ)。1歳の時、日清戦争での負傷がもとで実父は死亡、母もほどなく行方不明(離縁とか)、父の長兄玄治郎(後に悟玄)の養子となり、中西家を継ぐ。病弱ながら早熟で、養父が自由民権運動の闘士であった関係で、板垣退助にも可愛がられたという。

10歳の頃、養父の意思により、秩父に近い山中で150日の荒行(結跏趺坐108日、滝壺の水行21日、断食行21日)をさせられる。昼夜地べたに座り続け、蚊や虻に刺されても叩かず、動かず、ついには体の一部に苔が生えてきたというほどの相当の荒行ながら病弱だったはずの少年はよく耐え、座ったままの彼の膝や肩に、小鳥が来て囁りながら戯れるのを見て、子供心に自然の中にとけこむことの楽しさを知ったという。

この荒行の数年後、養父の方針で天台宗深大寺にて得度、この時の法名が「悟堂」である。仏門に入ったこともあって、山川草木や鳥や虫の中にも仏性を見るようになり、のち「人間は月へ行けても、木の葉1枚作れない」と人間の奢りを戒めることになる。

16歳で入寮した天台宗学林の寄宿舎東部寮で多くの哲学書や文学書に触れる。17歳の時、病患の悪化した義父の意思で曹洞宗の学校に移り、道元の禅風にも触れる。別子銅山の説教所に一人廻されて、6か月間の説教生活の間に地方新聞に寄稿していたのが、東京へ戻ってから詩や短編や随筆を書き出すことにつながる。19歳の時、義父死去。仏教新聞社に引き取られ、曹洞宗の学校にまた通い出す。政治犯としてお台場に隠棲していた大叔父(祖父の弟)中西勝男と偶然に出会って共に暮らすうち、海で両眼を負傷し一時的に失明、翌20歳の時の徴兵検査を免れる。

3年ほどして視力が回復すると、その心に飛び込んだのはかつて親しんだ自然の美と気高い静寂だったという。



善福寺の自宅で  
同居する野鳥と寛ぐ様子

宗教をテーマにした長編小説が出版に至らなかったのを機に創作をやめ、自然の世界に没頭し始める。僧職を離れ、千歳烏山に移り住んで「木喰採食」の生活を始めたのは30歳の時。33歳の年(昭和4年)、来日したインドの詩聖タゴールにより、インドの自然帰依に惹かれる。その後杉並善福寺池近辺に移

り住み、この自然の宝庫で昆虫や淡水魚、野鳥の観察に没頭し始める。自宅で野鳥の放し飼いをして話題にもなった。

1934（昭和9年）、知人らの強力な勧めで「日本野鳥の会」を創立、会誌「野鳥」を創刊する。少年時代からの仏教教育に基づいた万物に命が宿るといった自然観の影響もあり、自ら親しむ短歌や詩などの文芸あるいは絵といった方法で、鳥の愛護と保護を一般大衆に訴える雑誌を構想、民俗学者・鳥類学者・画壇・文壇の文化人と交流をはかり、野鳥保護運動に乗り出した。初の「探鳥会」を6月2、3日に富士山麓にて行う（写真参照、当時の錚々たる著名文化人が参加しており、悟堂の顔の広さをうかがわせる）。「野鳥」「探鳥」は彼の造語。

1934年6月2、3日の  
「富士山麓探鳥」の顔ぶれ  
金田一京助・春彦親子、柳田國男、  
半田良平、窪田空穂、北原白秋、  
内田清之助、岡茂雄（梓書房）  
などの姿が見える



戦争で中断した「野鳥」誌刊行は1947（昭和22）年再開された。

野鳥とともに始まった50歳代半ばからの悟堂は、「裸生活」の人生で、冬山でも裸で野鳥を訪ね、「裸詩人」の異名をとるほどだったという。「半ばは西洋文明と闘い、半ばは勝手なことを書きまくり」（Web「松岡正剛の千夜千冊」より1247夜、2008年6月18日）という後半生だったそう。

1984年（昭和59年）12月11日没、享年89歳。

参考文献：『野鳥と共に』（1935年・巢林書房発行、のち角川文庫）

『かみなりさま わが半生記』（1980年・永田書房）その他いろいろ



日光・太郎山（標高 2357m）ハイキング  
～標高 2000mに高山植物を求めて～  
7月 14 日（日） 天気・雨時々やむ

早い梅雨明け後も天候が落ち着かず雲行きが案じられた山行でしたが、案の定小雨模様の中の出発となり、いろは坂を登り中禅寺湖畔に出てもなお雨雲は厚く、光徳から分け入って太郎山登山口に到達したところで本降りに。しかしその周辺だけでもオオバボダイジュやヒロハカツラなど珍しい植物が幾つも目にとまり、植物ファンは満足げです。雨について登っていく他の登山者を見送りながら、未練なく撤退を決めました。

出発が早かったので、三本松茶屋の賑わいはまだ始まったばかり。雲も幾分薄くなってきたようです。トイレの建屋周辺でツバメやカマドウマを観察しながら、皆で相談の結果、戦場ヶ原に場所を替えてハイキングを続行することになりました。光徳入口から草原に入り、泉門池や青木橋を通過して赤沼まで、標高 2,000mこそないが、高原のお花畑を楽しみながら、広がった新しい木道をたどります。こちらも人で賑わい、泉門池では大きな団体が昼食中。その少し先でゆったり弁当を広げました。

後半また雨が降り始め、赤沼のバス停で雨宿りしながら、三本松に駐車した車が回されるのを待ちます。雨はすぐ止み、竜頭の滝を下った駐車場に車を置いて、しばらく周辺の草むらを観察後、今度は近くの「さかなと森の観察園」に入ってみることにしました。入園料を払うと、魚の餌を入れた小さなカップを手渡され、園内に幾つもある池の魚に自由に餌をやることができます。餌を播くと、養殖されている溪流魚が我先にと群がってきます。ここで飼われているチョウザメは、残念ながら餌には見向きもしませんでした。明治時代から続く水産研究施設の広い構内は、菖蒲が浜の背後の川（地獄川という）の流域の自然を色濃く残し、意外な穴場でした。

かくして、天候のために予定とは全く違ってしまいましたが、普段もっと奥の山に登るため通過してきたような場所や施設が堪能でき、それはそれで有意義な 1 日でした。



太郎山登山口にて  
雨のため登山を断念、引き返す前に

※ 参加者(敬称略)

小川知峻・真司、佐々木伸二・千洋・真澄・茂・理恵、鈴木若菜、平井亜湖、井上哲男、小島美穂、山口龍治、石崎隆史・裕子、阿部良司・みゆき (計 16 名)

※ 開花していた植物(太郎山麓)

バイカウツギ、チダケサシ、イワオトギリ、イタドリ、サワギク、ダイコンソウ

※ 開花していた植物(戦場ヶ原)

ハクサンフウロ、イブキトラノオ (ともに右写真→)、  
ホザキシモツケ、カラマツソウ、ノイバラ、ヤマオダマキ、  
マユミ、カンボク、レンリソウ (またはフタバハギ?)、  
イヌトウバナ、ノコギリソウ



※ 見た(注目すべき)樹木

オオバボダイジュ、ヒロハカツラ、ヤハズハンノキ (写真→)

※ 見た鳥、聞いた鳥(出た順)

ヒガラ、キビタキ、メボソムシクイ、ウグイス、ルリビタキ、  
ミソサザイ、カッコウ、アオジ、ホオアカ、クロツグミ (青木橋)



※ 目撃した昆虫(戦場ヶ原)

(蝶) ヤマキマダラヒカゲ、キタテハ、  
サカハチチョウ、イチモンジセセリ、  
コチャバネセセリ、ヒメシジミ

(蛾) タケカレハ、マツカレハ、イカリモンガ

(甲虫) マメコガネ、ミヤマクワガタ (♀)、  
オオトラフコガネ

(バッタ) マダラカマドウマ、ヒメギス (幼虫)



戦場ヶ原から見た太郎山  
いつまでも雲が晴れない

《旅の記録》

行 程：北小 5:00——(日光宇都宮道路)——日光——光徳入口——(志津林道)——  
7:30 登山口 8:00——三本松……9:00 戦場ヶ原 (光徳入口……泉門池……  
青木橋 (昼食) ……赤沼) 13:00——14:30 さかなと森の観察園 15:30  
——(日光宇都宮道路)——16:30 北小

費 用：日光宇都宮道路 (土沢～清滝) 普通車 150 円×2  
さかなと森の観察園入場料 おとな 300 円、子ども 100 円

山口さんの自然講座

太郎山登山に参加して

太郎山は男体山の隣の山で、共に約1万3000年前に安山岩を噴出して出来た山です。安山岩質マグマは温度が低く、粘り気が強く、火道(マグマが出て来る穴)が詰まり、爆発を起こして吹き飛ばぶので、きれいな山にはなりません。ところが、男体山の火道は大規模だったためマグマがスムーズに流れ出たためきれいな山となり、全国的に見ても例が少ない火山です。

北小学校に集合した時、雨が降り出したが、山上では晴れていることが多く、大丈夫だと思っていたのに予想が外れた。太郎山の林道を車で進んだが雨で登山は中止。車を降りた所にヤマブキショウマ、イワオトギリ、バイカウツギの花が見られた。全国的にも珍しいヒロハカツラやオオバボダイジュもあり、これだけでも大満足。

戦場ヶ原まで戻ると雨が止んだので、その辺の散策となった。ハクサンフウロ、イブキトラノオ、カラマツソウ、ヤマオダマキ、ノハナショウブ、ツマトリソウ、クルマユリの花が見頃で、ホザキシモツケも開花し始めていた。コオニユリはつぼみ。

昼ごはんを食べている時、食虫植物の本を持った女性が通り過ぎて行った。後でその人とまた行き会ったので、モウセンゴケありましたかと声をかけた。すると「ぜひ見たいんですがいいんです。見ましたか?」と言う。バスガイドからこのあたりにあると聞いたのでさがしているという。以前はあっただろうが、今は背の高い草が占めている。モウセンゴケは小さく、コンペジションにはかなわない。そこで、背を高くするよりも、捕虫を行うことで栄養を補い、他の植物は生えられない養分のない所や酸性の強い所でも生きられるように進化した植物です。そのことを話し、背の低いミズゴケなどのある日当たりのよい所を探して下さいとアドバイスして別れた。

昆虫ではマダラカマドウマが共食いしているのを見た。よほど腹が減っていたの

(次ページへ続く)





か、初めて観察した。帰りの車を待っているところでヒメギスがたくさんいた。下界では成虫になっているが、ここは標高が高く、出て来るのが遅いのでまだ幼虫である。ここではタケカレハの成虫も見た。月報 14 号に私の手のひらで写した幼虫の写真が出ている。

カレハガ類やドクガの一部は毒毛を持っています。刺されると激しい痛みのあるイラガ類など危険なものもたくさんいます。毛虫を素手で触る人はいないと思いますが、真似しないでください。  
(山口龍治)

✽ 戦場ヶ原自然図鑑



バイカウツギ



ホザキシモツケ



クルマユリ

葉のつき方が車輪状



ヤマオダマキ



ツマトリソウ



ノハナショウブ



←ヒメギス (まだ幼虫)



←ヒメシジミ



←ミヤマクワガタ (♀)



ミズチドリ

## 北光クラブ・サマースクール 2013

### 昆虫観察

8月4日(日) 天気・晴れ

おもに樹液に集まる昆虫の観察をします。

近くに川があると水生生物の観察になってしまうかも。

日 時：8月4日(日) AM6:00 北小西門集合(～9:00)

場 所：鹿沼市内の雑木林、河原など。

持ち物：捕虫網、虫かご

薄手のジャンパー、長そでシャツ、長ズボン、帽子、長靴、軍手。

白っぽい服装で。

参加費：300円

早朝6時、北小西門内に親子合わせて30人ほどが捕虫網や虫かごを携えて集合し、「今日捕りたい虫」を発表し合った後、車を連ねて御成橋近くの玉田のグラウンドに向かいます。まずはヤナギなどの生えた黒川河川敷の藪に入り、しばし虫さがし。今年はあまりいないな～。

次に日光市岩崎まで足を延ばし、毎年訪れている雑木林に分け入ります。親も子も夢中で木を蹴ったり木づちで叩いたりして、びっくりして落ちて来たり飛び立ったりするカブトムシやクワガタを追いかけ、目当ての虫をたっぷり捕獲しました。分け合って、欲しい人にも十分行き渡ったと思います。

日の高くなる前に解散となり、皆満足げに帰って行きました。

昔懐かしの典型的夏休み行事に、早くも「来年も」という声があり、豊かな収穫をもたらしてくれる環境が保たれることを願ってやみません。

#### ※ 参加者内訳

1年生3名、2年生3名、3年生4名、4年生1名、5年生4名、

保護者12名+スタッフ4名(計31名)

#### ※ 目撃した昆虫

ナミアゲハ、ヤマトシジミ、ベニシジミ、アオハダトンボ、オニヤンマ、コオニヤンマ、

ミヤマアカネ、シオカラトンボ、ノシメトンボ、スケバハゴロモ、オオカマキリ、

オンブバッタ、マダラバッタ、エンマコオロギ、ヒメスズメバチ、オオスズメバチ、  
マメコガネ、カブトムシ、カナブン、ヨツボシケシキスイ、キマワリ

✿ 虫とりの風景



「今日、何を捕りたいですか？」



河原の藪にも可憐な花  
イシミカワ（トゲあり）



こんなカタツムリも  
（ヒタチマイマイ）



これは毒キノコ！



雑木林でてんでに虫とりに興じる



成果はまずまず  
意気揚々と引き揚げる



雑木林の前に昆虫ハンター勢ぞろい



雑木林の外は夏の田んぼ、水路にも何かいる？

頭上の茂みの中にシマヘビが…  
アマガエルを狙っていた



※ 参加者からいただいたおたより

こん虫観察の時は、ありがとうございました。みんなが、阿部さんについて行き、たくさんのカブトムシなどをとっていました。ぼくも、たくさんとすることができました。

目標としていた、クワガタもとれました。それも、阿部さんがぼく達をゆうどうしてくれたおかげです。今は、とったこん虫を観察しています。今年もありがとうございました。来年も、もしやっていただけたその時は、行こうと思いました。

(北小5年・栗山拓己)

8月4日、雑木林の昆虫観察会でのこと

黒川の河川敷に園芸植物が野生化していて、名を聞かれた。4枚の白い花びらが風に揺れると、蝶が舞っているように見える。大阪で開かれた花博以来、日本に入ってくる園芸植物は数えきれないほど増えた。それよりも、地味で見栄えのしないネ科やカヤツリグサ科など、野山に自生する植物の方が好きなのです。家に帰ってから調べると北アメリカ原産で、アカバナ科ガウラ属のハクチョウソウ(別名ヤマモモソウ)であったので報告します。

(山口龍治)



# 北光クラブ・サマースクール 2013

## 水の生き物観察

8月11日(日) 天気・晴れ

御成橋・北押原などの“穴場”をめぐって、  
網で魚や昆虫などの水生生物を捕ります。何がかかるとはお楽しみ。

日 時：8月11日(日) AM8:00 北小西門集合(～11:00)

場 所：御成橋や北押原などの黒川河原や用水路。

持ち物：D型の網、ズックびく、またはバケツ。

水遊びできる服装、水に入ってもよい運動靴または長靴。

参加費：300円

朝8時、北小西門内に手網やバケツを持って集まった親子を中心に30数名、今日は何を「捕りたい」「見たい」を発表し合った後、まずは黒川に架かる御成橋の下へ。猛暑の朝ですが、いつも上を渡っている橋の下は、大きな日陰になっていて幾分涼しくほっとします。子どもには危険なため、阿部講師だけ川に入って網を入れ、子どもたちは岸から手網で魚を掬います。水槽に入れられたフナやドジョウやヌカエビやヤゴに、川の意外な豊かさを感じます。

次に北押原へ向かい、コミュニティセンター脇の水路に今度は皆で入って、水生生物の捕獲に歓声を上げながら取り組みました。

実はこの水路端のサクラの木にイラガの幼虫が大発生していて、「触れるだけで激痛！」という危険昆虫の被害者が出なかったのが幸いでした。川を引き上げた後、近所にお住まいの金子さんが声を掛けて下さり、趣味の化石コレクションを見せていただきました。



### ※ 参加者内訳

1年生5名、2年生3名、3年生4名、4年生1名、5年生5名、6年生1名、  
保護者14名+スタッフ4名(計37名)



※ 当日の獲物

ギンブナ、ヌカエビ（以上、御成橋）、カワムツ、ウグイ、タモロコ、ムギツク、カマツカ、アメリカザリガニ（以上、北押原）

※ 魚とりの風景



今日捕りたいもの、見たいものを発表し合います



御成橋の近くに車を停めていざ出陣



御成橋の下は薄暗くて少し涼しい…  
水が深いので子どもたちは岸から網を入れ、  
“隊長”が川に入って大網を振るう



いるいる、  
魚の他にもエビやヤゴや…



北押原コミセン脇の水路



今度は子どもたちも水に入って  
魚捕りに大はしゃぎ



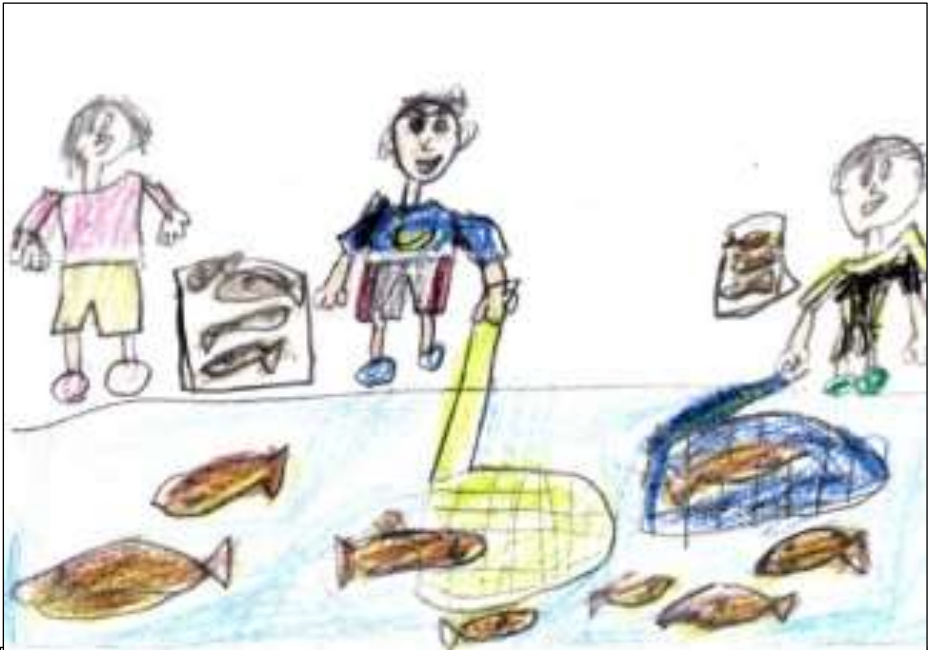
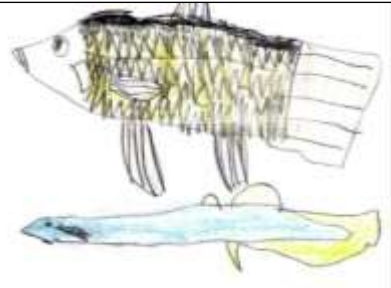
※ 参加者からいただいたおたより

さかなのなまえをいっぱいおしえてくれてありがとう。

いっぱいさかながいたけど ざりがにのあかちゃんとざりがにいたね。

コミュニティでもさかなをみたね。

(幼稚園・山木菜摘)



8月11日にサマースクールで水の生きものかんさつがありました。

はじめに黒川で魚をあみでとりました。魚をとったらあべさんがその魚のいろいろなしをしてくれてうれしかったです。

あみであべさんはいろいろな魚をとっていてすごいと思いました。

きたおしはらコミュニティセンターのちかくの川ではあみでぼくのバケツにいれてくださってありがとうございました。まん中らへんはかたくてはじっこはやわらかくてあしがはまったりするっておしえてくださってありがとうございました。おおかげでだんさがある川になかなかはいれなかったのにはいれました。

(北小3年・山木和磨)

カヌマ大学開催！  
8月3日（土） 天気・晴れ

「まちの生活や文化、サブカルチャーをテーマとした授業で、おしゃべりを楽しむ場」を提供する活動を展開している「カヌマ大学」が、クリーニング屋の裏庭に開設された「黒川水族館」を面白がって、第3回授業の題材として取り上げていただきました。

当日は午後3時過ぎからスタッフも含め十数名の方が見えて、俄か仕立ての図鑑や案内図を片手に、裏庭から物置小屋にかけて何種類かごとに分けられた小魚の水槽や、ウナギ、ナマズなどの水槽がずらりと並ぶ様子を見ながら、身近な黒川にこんなにあくさんの種類の魚がいることに歓声を上げていました。

見学の後は裏路地をそぞろ歩いて饗茶庵へ、日光の天然氷のかき氷で涼をとりながら、なおも魚談議に花を咲かせました。

※ 鹿沼ケーブルテレビ「鹿沼トピックス」9月7日号で紹介される予定です。

虫のいる風景



セスジスズメ/ナナフシ  
照明に誘われて店内に迷い込む



アブラゼミを捕食する  
オオカマキリ

セミは頭から食べられながら  
腹だけでいつまでも鳴いていた



タマムシ  
サマースクール昆虫観察の折、  
「タマムシを見たことがない」との話をしたところ、  
本会にお孫さんを連れて参加されていた塩入宏行氏が、  
「タマムシがいたよ」と  
ご自宅マンションに迷い込んだという実物を  
事務局まで持って来て下さったものです。



## 那須・茶臼岳ハイキング

那須の歴史や伝説を書きだしたら、この短い文章には入りきらぬだろう。それほど古くから広く知られた地名である。もちろんそれは那須野の方だが、その広々とした量を除外して那須岳は考えられない。那須岳はその裾野によって生きている。(中略)

まず正面に大きく現われるのが茶臼岳である。これは那須連山の最高峰であるのみでなく、盛んな噴煙をあげているので、一偉観である。現在唯一の活火山である。

那須五岳と称えられるのは、南から、黒尾谷岳、南月山、茶臼岳、朝日岳、三本槍岳を指すが(異論もある)その中枢部の茶臼、朝日、三本槍を、所謂那須岳と見なしていいだろう。茶臼は名の通り臼型のコニーデであり、朝日が峨々とした岩の盛り上がりであるのは、かつての噴火の火口壁の名残りだという。三本槍はその名から察して鋭い岩峰を思わせるが、実はそうではなくなだらかな頂を持っているのは、その北肩が下野・磐城・岩代の三国境になっていて、封建時代に黒羽藩・会津藩・白河藩の武士が所領を確かめるため、5月5日の節句にそれぞれ槍を携えて登山し、山頂で3本の槍を立てた行事から来た名だそうである。この三本槍岳も昔は火山活動をしていたことは、その断崖によっても察しられる。(後略)

深田久弥『日本百名山』(昭和39年7月20日発行)より「24 那須岳(1917m)」

那須の主峰・茶臼岳(1,715m)にロープウェイを使って登り、秋の植物を観察しながら下りてくる予定です。

日 時：9月15日(日) AM6:00 北小西門集合(解散はPM5:00頃)(雨天中止)

行 程：鹿沼——(東北自動車道)——那須——那須岳ロープウェイ山麓駅——(4分)

——山頂駅……(40分)……茶臼岳……峰ノ茶屋……那須岳ロープウェイ

山麓駅——那須——(東北自動車道)——鹿沼

服 装：長袖シャツ、長ズボン、防寒着(セーター、ジャンパー)、帽子、手袋、

軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒、レジャーシート、雨具(しっかりしたものを)、

お弁当、おやつ、お手ふき、タオル、ちり紙、筆記用具、レジ袋

あると便利なもの：双眼鏡、図鑑、ルーペ、カメラ、高度計、ストック、

1/25,000 地形図は「那須岳」

会 費：おとな 1200 円、子ども 600 円

(高速道路通行料、ロープウェイ片道料金含む概算、当日集金)

今年度初参加の方は年間保険料 800 円。

申し込み：9月13日(金)までに、

チャレンジスクール申込書で北光クラブ、または 090-1884-3774 阿部

問合せ：自然観察クラブ 阿部(電話 090-1884-3774)

石崎(電話 090-1464-6899)



### 生き物係の手帖・4

#### ドジョウ

今年の黒川水族館は「黒川の大物」と題し、大物を集めて展示しようと考えていた。しかし残念ながら昨年9月から取り組んでいるコイ釣りは一向に上達せず、いまだに1匹も釣り上げていない。コイ釣りに挑戦し始めて最初に釣れたのはオオクチバス(ブラックバス)で30cmほどの大物であったが、翌日死んでしまった。暗くなるまでやっているとは60cm級の大ナマスが釣れる。大雨の翌日で水が濁っていてもナマスが釣れる。それでナマスは25cm、35cm、50cm、50cm、60cmと5匹集まったが、コイは網で捕まえた30cmに満たないものがあるだけだ。

そんなわけで、今年の水族館はおおびらに公開するのをやめた。ただ、あまり目立たぬ存在ではあるが、6月ごろ、魚捕りをしていてある大物が網に入った。ドジョウだ。たしか7年ほど前の9月、板荷の「わくわくネイチャーランド」で宿泊する北小5年生のために水族館を作ったことがあった。魚を集めるために縦山の新堀に行くと、たまたま水が完全に引いていた。そしてある場所だけ水が残って池のようになっていた。「しめた」と思って網を入れると1回で網が重くなるほど魚が捕れた。種類も多く15種類。その中に15cmくらいのドジョウが十数匹いた。ドジョウでは最大級なのだと思う。

水族館が終わってたいいの魚は放流したが、飼育が簡単なフナとタモロコ、ドジョウだけは続けて飼っていた。特にターボファン(水面に風を当てる)で冷やすこと

(次ページへ続く)

もせず、翌年の夏を越すことができた。ところがうっかり、まだ大丈夫と思って水交換が遅れ、ドジョウは全滅してしまった。ドジョウは1匹が死ぬと、たとえ急いで水交換したとしても全滅してしまうことがある。たぶん1匹が死んだ時、すでに病気が蔓延しているのだと思う。それでもこの年の夏は、同じ場所に網を入れると、同じくらいの大きさのドジョウが1～2匹捕れた。

ところがここ2～3年は大きなドジョウが全く捕れない。それどころかやっと捕れた10cmにも満たないドジョウを持ち帰って水槽で飼っていても、2～3日たつとかびのようなものが生えて死んでしまう。

新堀では6月頃まではドジョウがいるが、真夏になると全く捕れなくなる。小さな用水路では捕れることもあるから理由はわからないが、あるいは産卵のために田んぼに入っているのか。最近、上流の下達部あたりのアブラハヤやホトケドジョウのいる冷たい水の流れる用水路にドジョウがたくさんいるのを見ると、ドジョウも暑さを嫌って上流に分布域を替えているのか、また下流に残ったものは暑さに耐えられず、カビが生えて、大物になれぬまま死んでしまうのか、そんな思いがよぎる。

少なくともウグイ、カワムツ、オイカワ等は特に上流の魚ではないが、特に大型の個体はターボファンでできる(3～4℃水温を下げる)程度の冷水対策では夏を越すことはできない。黒川水族館ではビニールホースを輪にして水槽の中にひたし、そのホースにいつもチョロチョロ井戸水を流すことによって水槽の水を冷やしている。6月に捕れたドジョウ(マルタクん)は大きさは15cmにも満たないが太さが尋常ではなく、皮膚の柄を作るひとつひとつの模様がとても大きい。大きなフナと一緒に水槽に入れて同じ方法で水を冷やし、冷凍赤虫やメダカのえさをやっている。

最近では黒川のアユが冷水病で死んでしまう、という話を聞く。冷水病というと、水が冷たすぎて起こる病気かと考えてしまいがちだが、実はその逆だ。水が温かいためにアユの皮膚におできのようなものができて死ぬ、というのが本当らしい。地球温暖化(高熱化と言うべきだ)による影響は地球のあらゆる場所に及んでいる。黒川でもしかりだ。

(阿部良司)



☞ 本号の内容 ☜

表紙の本	中西悟堂著『昆虫読本』より・・・・・・・・・・・・・・・・	2
活動報告・1	日光・太郎山（標高 2357m）ハイキング ～標高 2000mに高山植物を求めて～・・・・・・・・	6
活動報告・2	北光クラブサマースクール 2013・・・・・・・・	10
	昆虫観察	
	水の生物観察	
活動報告・3	カヌマ大学開催！・・・・・・・・・・・・・・・・	16
虫のいる風景	・・・・・・・・・・・・・・・・	16
次回案内	那須・茶臼岳ハイキング・・・・・・・・	17
生き物係の手帖・4	ドジョウ・・・・・・・・	18

**会報の購読について**

会報はインターネットでご覧になれます。

また印刷したものはクリーニングハウスあべ店頭に置いてあります。（無料）

確実な入手をご希望の方は、年会費（1,200円）をお納めいただければ、  
ご自宅まで郵送いたします。

**鹿沼の自然・栃木の旅 月報第16号**

2013年9月1日発行

北光・自然観察クラブ

鹿沼市戸張町1818

（クリーニングハウスあべ内）

発行人 阿部 良司

年会費 1200円



ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

